

はじめに

今年度、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定3年目に行われる中間評価が実施されました。中間評価は、学校が作成した自己評価票、研究開発実施報告書等の資料及び学校へのヒアリングをもとに評価委員が本校SSH事業の評価を行います。その資料に研究テーマ2探究型授業の開発の成果物である「見せどころ設計マニュアル」も提出しました。ヒアリングでの評価委員からは、管理職の理解の下、主体的な学びを目指し、全教科・科目で組織的に展開している点が評価されました。一方で二高ICEモデルの質的な検証と更なる普及を推進してほしいと課題もいただきました。

令和元年7月、新高等学校学習指導要領と学習評価の改善についての指針が示されました。そこには「生徒がどういった力が身に付いたのか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められています。この指針の実践として昨年度、「ICEモデルとIDの視点が両輪として機能することで深い学びが実現できる」と仮説を設定し、この実現のために、見通しが立つ指導が学習につながる取組となり、継続して授業改善が前進するよう、探究型授業開発の全体像を図式化（p14参照）しました。この図式に従って今年度の取組は、グラフィックシラバスの作成、授業改善の工夫の見せどころシートの作成、生徒による授業評価の項目に「ID/ICE」の視点を盛り込んだ「生徒主体の学びのデザイン」がなされているかを問う授業振り返りシートの作成・実施、さらに本校職員から提供された「思考を深めるCEの考査問題」を外部先進的取組実践者から工夫の提案をいただき、その内容を全職員で共有できるようにしました。また、「主体的な学びフォーラム」を11月に開催し、全ての教科で実施している探究型授業の成果を県内外の教育関係者に普及する機会としました。

ロシアの教育心理学者ヴィゴツキーは、著書「教育心理学講義」でこう述べています。

実生活において、創造的気質を身につけたものだけが、教育学における創造性を追求することができます。それゆえ、未来の教育者は実生活への活発な参加者となることでしょう。理論的科学や労働ないし社会的実践活動の分野においても、教育者は自分の教科を通して学校と生活とを常に結びつけることでしょう。このようにして、教育活動は、必ず学者や政治家あるいは経済学者や芸術家の幅広い社会的活動と結合することになるでしょう。

本校の多様な取組は、まさに教師の探究活動です。教師自身の授業改善の進捗を「ID/ICE」を用いて俯瞰すると授業改善を可視化できます。そうすれば取組もさらに主体的・対話的になり、深い授業改善へと発展していきます。次年度も、この授業改善の研究開発の歩みを継続してまいります。

「二高ICEモデル」

カナダで実践される、Ideas（知識）、Connections（つながり）、Extensions（応用）を軸とした評価法（ICEモデル）をもとに、主体的な学びを評価する指標。「二高ICEモデル」では、Ideas（習得）、Connections（活用）、Extensions（探究）と定義する。より探究型授業の評価を意識したモデルとなっている。

「ID（インストラクショナルデザイン）」

教育活動の効果と効率と魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学習支援環境を表現するプロセス。